

目次

田上時子のエッセイ 思春期に伝えたいこと.....	1
特集 メグさんとバーバラさんの子どもを被害者にも加害者にもさせないために...	2~3
活動報告	
一人芝居「無言の叫び」/大阪府教育委員会委託事業一出前講座.....	4
アンディ・ヒクソンさんの 非暴力アクション・ワークショップ ファシリテーター養成講座.....	5
リレーエッセイ 家本めぐみ/竹田悦子.....	6
講座インフォメーション.....	7
会員の紹介・入会のおさそい.....	8
編集後記.....	8

田上時子のエッセイ

思春期に伝えたいこと

7号から、NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西 理事長 田上時子がエッセイを連載しています。いまそこにある問題に対して、NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西 は何ができるのか、具体的にその目指すものについて語ります。

思春期の女子による事件の報道が続いている。数から言うと圧倒的に多い男子による事件は陰を薄め、女子に注目がいつている。女子による事件は数少ないから珍しいのであり、珍しいからニュースになるのである。子どもの問題は思春期問題だと言ってきた。7歳で非行を起こすことも8歳で援助交際に走ることも9歳でひきこもることもほとんどない。思春期とは青年期の前期をいい、第二次性徴を迎えたときをいう。女性では月経が始まる時を思春期といい、閉経時を更年期という。思春期の始まる平均は12~13歳、からだに変化が起こり、こころが不安定になる。からだに変化が起こるのだから、こころに変化があるのは当然で、「自分でもよく分からないが感情がコントロールしにくい」時期である。葛藤の時期である。思春期には何が起ころうとも不思議ではないと言ってきた。誰にでも思春期は起ころう。私にもあった。ただ、今の思春期を難しくしているのは子どもを取りまく社会環境の激変であり、子どものコミュニケーションのツール(手法)が違っているのだと考える。昔はパソコン、インターネット、携帯も出会い系サイトもなかった。何が起ころうとも不思議ではないその時期に、おとなの私たちができることは何なのだろう。一つは棒を踏み越えさせない、ここまでは許されるがこれ以上はいけないう「制限を設ける」ことであろう。二つ目には思春期になる前に子どもに思春期とは何なのかを教えることが予防

になるだろうし、おとなも今の思春期の子どもを理解する必要がある。

三つ目に、私は子どもが思春期になれば、おとなは思春期をおとなになる過程であることに敬意を表し、子どもの15歳の誕生日にでも、「あなたをこれからは子どもというよりも家族の成員として見るから」と「親離れ・子離れ」の儀式をして、それ以降は親が子どもをおとな扱いすればいいと思っている。日本の思春期は始まりは年々早くなっているにも関わらず、終わるのは年々遅くなっている。パラサイト現象や30代での結婚・出産が一般になっているのもその表れだろう。一方で、日本は世界でも最たる長寿国だから何も急いでおとなになる必要はないという意見があるが、わたしはそう思わない。おとな扱いするということはタバコ・酒を解禁する、早くから労働を強いるということではなく、自分の人生を自分でコントロールしてもいいというメッセージを思春期にもなれば与えた方がいいという意見だ。誰も急におとなにはなれない。おとなになるには時間がかかる。早くからおとな扱いしてじっくりゆっくりおとなになるのを見守ってあげればいいのだ。

おとなはかつての自分の経験から、思春期はまだ子どもなんだからと考えがちだが、見方を変えた方がいいと思っている。おとなが話を聞いてやることで、感情への対処法を学び、身につける練習を、時間をかけてしていくことを提案したい。